

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

31

第四回受賞作品（二〇〇三年）

自由学園明日館

後編

老朽化が進んでいたなか、明日館の保存修理がようやく決定。しかし、歴史的建築物の動態保存という新たな試みへの挑戦のため、設計面施工面とも、次々と難題に直面することになった。厳しい工事を経た今、ライト設計の建物は美しくよみがえり、日々多くの来館者を迎えている。

ホール内は喫茶スペースとなっていて、お茶やお菓子を楽しむこともできる。建物に合わせてデザインされた椅子が、空間を楽しく彩っている。

オリジナルを尊重しながら、
どれだけ動態保存に
配慮するか

自由学園明日館は一九九七（平成九）年に国の重要文化財に指定された。その後、建物調査と改修設計を担当したのは、公益財団法人文化財建造物保存技術協会（文建協）。国の外郭団体で、文化財建造物の修理、設計、監理を担当する組織だ。社寺建築、近代建築から産業遺産まで広範囲のものを扱うが、件数的には社寺が圧倒的に

多く、明日館のような西洋建築の建物を動態保存する事例は、今まで経験したことがなかった。

文建協の向井禪氏は、当時の現場で所長を補佐する立場として、調査やそれに基づく図面化などの業務にあたっていた。改修に際しては、建築主である自由学園から修理委員会に「五十六項目の改善要求」が出され、委員会で決まったことを文化庁に上げ、文化庁による最終的な決定を仰ぎながら進められた。そこで文建協が担当したのは、文化庁と自由学園のいわ

ば調整役。

結果的に「五十六項目の改善要求」は、文化庁により受け入れられたものもあり、受け入れられなかったものもあった。文化財の保存である以上は、オリジナルの形を尊重しなければならないという大原則があるが、一方で建物を使いながら残す、動態保存への配慮もあったと言えよう。

一方で、食堂の地下には古く小さな厨房があったが、今となっては狭くて利用価値がない。この厨房をなくして、空調のための機械設備を置きたいという要望は認められ、設備の充実が図られた。

また、トイレはオリジナルでは大谷石の敷石のモザイク模様の床だったが、時代に則したものに改変する必要があり、ライトのデザインと勘違いされないような無難なものにされた。

解体して初めて見つかる
建物の問題点

たとえば明日館の建物では、旧帝国ホテルと同様に建物の外部、内部、前庭の歩道に大谷石が使用されている。改修前、前庭の歩道の大谷石はすり減って目地が浮き出てしまっているような状態だった。これを再び大谷石で補修しても何十年後にはまた同じことになってしまふ。もっと固い石に変更したいというのが自由学園側の要望だった。しかしライト建築と大谷石は切り離せないもの。建物の内部、廊下、そして外部すべてに大谷石が使用され、その一体感が建物全体を際立たせている。結局、歩道の改変は却下され、酸性雨対策や摩耗対策の薬剤を大谷石に塗布する対策がとられた。

建物の構造は、アメリカで広まっていた2×4工法によるもので、近代建築の文化財に多い煉瓦造やヨーロッパ式の木造とも異なり、解体して初めて問題点が見つかるということも多かった。使える部材は極力残されたが、雨漏りのため、壁の内部は七〇八割を新しい材料に替えるを得ない状況であった。そのほか復元の参考にされたのは古写真。当初の図面は完全には残っていなかった。

向井氏は「一連の工程のなかで



学校であるから昼間しか使用しないということで、創建時には照明がほとんど設けられなかった建物内には、ところどころ天窗が効果的に用いられている。



2階食堂の椅子とテーブルは遠藤新がデザインしたもの。この部屋は、保存修理後、パーティーや結婚式の披露宴などに用いられている。

一番の苦渋の選択は、西教室の柱を切断せざるを得なかったことでした。東教室と西教室は竣工時期が異なり、後から作られた東教室の柱は、大谷石の上に土台が載る形で、耐久性に問題はありませんでした。しかしライトが日本にいた時期に造られた西教室の柱は、土台が地面すれすれにあり、柱の部分まで腐ってしまっていました。これをそのまま復元するわけにはいかない。さまざまな案が検討されましたが、結局柱の下部分だけを切って土台の位置を上げることで国の許可を得ました」と語る。



東教室側の廻廊。床面や柱の土台には大谷石が使用されている。ライトは同時期に取りかかっていた帝国ホテルに使用するために大谷石を選び、それが明日館にも多く用いられた。

これはライトが高温多湿の日本の気候に配慮せず設計したために起きた柱の腐食だが、明日館が文化財に指定された一番の理由はライトのデザインに対してである。それを変えることを極力避けたかったがやむを得ない選択だった。

オリジナル工法も踏襲しながらの保存修理

施工は、指名競争入札を行った結果、大成建設(株)に決まった。そこで大成建設は、文化財研究を専門としていた高橋城治氏を現場に送り、工程調整や職人との連絡調

整、施工図の作成などの実務を担当させた。

高橋氏は「明日館の現場は、文化財の保存修理であるため、通常の建物施工とは異なる工程や作業が発生します。そこで、なぜこの作業が必要となるのかを文建協側から聞き、その意味を理解しながら現場で指示をすることに配慮しました」と当時を振り返る。

大谷石の施工に関しては、石の性質を真に理解し加工技術にも長けている関東大谷石工業(株)が担当。また、建物が老朽化し傷んでいるなかで、できるだけオリジナルの形を残すために細かい仕事ができる職人が必要だということがあり、数寄屋専門の木工が呼ばれた。

オリジナルの部材を可能な限り残す方針のため、壁や床など、再利用に耐えない部材を補っていく作業にもあたった。また、構造の補強、空調、トイレの改築など、動態保存に対する改築に関しては施工者側からさまざまな提案がなされた。また耐震補強には、大成建設の構造設計部の技術が導入されている。

設計者より

文化財修復一筋で来たなかでも新たに多くのことを学んだ現場でした



公益財団法人
文化財建造物保存技術協会
向井 祥 Yuzuru Mihai

わたしたち文建協が関わる文化財建造物は、社寺がかなり多いので、自由学園のような西洋建築それもライト設計のアメリカの2×4工法で建てられたものを担当するというのは、まったく新しい経験でした。

また、動態保存を見込んでの改修は容易ではありませんでした。改修の方針は最終的に文化庁が決定していたのですが、解体してみても初めてわかる問題点も多々あつて、調査・設計が始まってから改めて文化庁と相談しながら進める

こともありました。

現場では、西教室の柱を切断するという苦渋の選択など、いろいろな問題が生じていたので、完成した時には一際感慨深かったのを記憶しています。自由学園側では、改善要求されていた項目が全部通らなかったのですが、それでも相当喜んでいただいたので、ともにこの現場を経験できたことをうれしく感じました。

それまでは私も社寺などの現場で経験を積んできて、文化財の修理や価値についてはある程度自分のなかに枠組みができていたところで仕事を進めてきました。そんな中で動態保存を試みるこのプロジェクトに関わって、もう少し広い視野で建物や文化財の価値を考えるきっかけになったと思います。その後、金沢城や沖縄の石造の貯水施設などの改修を担当しましたが、やはり明日館での経験は大きな糧になっています。

施工者より

リリースピッチャーとしても、意義深い仕事をさせてもらいました



大成建設株式会社 東京支店
高橋城治 Joji Takahashi

この明日館で初めて文化財改修の施工現場に携り、それ以後もさまざまな国宝、文化財の改修を担当してきました。今振り返ってみると、この明日館ほど、工事の途中で検討課題が多く発生したところはありませんでした。

動態保存を前提としての復元でしたので、通常の文化財修復よりも施工者が提案をしたり、大手ゼネコンならではの技術を提供したりという場面も多くありました。そんなことで、いろいろな意義深い仕事をさせてもらった現場でし

た。

けれども文化財修復というのは、あくまでも建物ができた当時の姿と技術を継承していくことが本来の仕事です。われわれはリリースピッチャーのように何十年後、百年後に建物を引き継いでいくような存在。それはいつも意識しています。

明日館の改修は、建築界のなかでもライト設計の作品の動態保存ということで認知度も高く、その実績を評価してもらえたのか、これ以後弊社では社寺や洋風建築など、大小合わせて一〇件ほどの文化財修復のプロジェクトを手掛けています。

現在、明日館の講堂は耐震補強工事中ですが、今はその現場代理人として勤務しています。入札で決まった仕事ですが、一四年前の改修の経験を経て、またこの場所に戻ってこられたことをうれしく思っているところです。



芝生が美しい前庭では、結婚式の記念撮影のほか、花見などのイベントも開催される。

高橋氏によると「オリジナルの建物は骨組みがベイマツ（米松）です。日本では杉材が一般的ですが、改修では外から見える部分はベイマツを使用しています。施工方法に関しても、アメリカ式の日曜大工の延長のような手法が主で、日本の大工だと木材同士を組んで丈夫にするような部分も、釘留めだけで行われていました。そのような施工方法も基本的には踏襲しましたが、鉄のプレートをあてて補強したりしています」と言う。

昔の明日館の姿をめぐって 卒業生の間で起こった大論争

改修に当たり、自由学園の卒業生の間で大論争となったのが、明日館の外部木部の塗装を何色に修復するかという問題だった。改修直前まで外部木部は屋内の木部と同じ茶色。しかし解体調査の際に食堂の増築部分の床下から転用された緑色の竣工当初の木材がでてきた。さらに当時の生徒が描いていた絵でも木部は緑色に描かれていたため、当初の外部木部は緑色であったことが判明。

一方で、保存運動に熱心だった卒業生たちが長年親しんできた外部木部は茶色。そこで茶色にするか、緑色にするかで「緑茶論争」が発生。このことは専門家も含めた修理委員会でも議論になり、最終的には発見された当初材、生徒の描いた絵を根拠に緑色とされた。同時に屋根も戦後鉄板に葺き替えられ黒かったものを、オリジナルの銅板（緑青銅板）に葺き替えた。

また、ホール南面の幾何学模様の縦長の大きな窓は、当初上下に三分割されていたが、教室として使いにくかったために四分割されて長期間使われていた。そうした目に見えた形での建物改変もことごとくオリジナルに戻された。

今年で改修竣工から一四年が経ったが、建物を運用していくうえで特に問題は生じていない。文化財の改修は、通常の建物の場合とは違い、とにかく壊れないように、維持管理がしやすいようにということが念頭に置かれるわけではない。オリジナルの状態を保全すること、創建当時の技術を踏襲することに重きが置かれ、改修から約

百年後に行われるであろう次の大規模改修までに、文化財として引き継いでいくことが目標となる。

動態保存の成功例となった明日館には、現在も全国から見学や視察が相次いでいる。「使ってこそ、建物に残した意味がある」というこの形は、以後広がっていき、文化財保存の画期的な好例となった。

8月の第3金曜日に開催される一夜限りのビアテラス。普段立ち入ることができない芝生の上で、ビールを飲むことができる。

